
南くんと新藤家のヒトビト

富橋まりか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

南くんと新藤家のヒトビト

【Nコード】

N6267K

【作者名】

富橋まりか

【あらすじ】

学年のアイドル、新藤ひかりに告白された南くん。そんな彼を待っていたのは、彼女のきょうだいたち!!

「ひかりと付き合うなんて許さない!!」
南くんとひかりの恋の行方は!?

八月二十八日、第十三話修正しました。

南くと愛の告白（前書き）

この物語はフィクションです。実在の人物・団体・事件とはいっ
さい関係ありません。

南くと愛の告白

「み、南くと……わたしと付き合って下さい！」

「……へ？」

ちよつと待つてくれ。このシチュエーションはどういうことだと南くとことおれは思った。

ここはおれの通う陽之丘高校の体育館裏だ。周りにはたくさんポプラの木がはえていて、新緑の若葉を風に揺らしている。

そして目の前にいる同級生の新藤ひかりが、先程いわゆる『交際のお申し込み』をおれにした。

本当にこれはどういうことなのだろう。あの新藤ひかりがおれにこんなことを言うなんて。

おれの頭の中を今日の朝からの出来事が駆けぬけていった。

朝、生徒玄関で自分の靴箱を開けると、上履きの上に真っ白な封筒が置いてあるのが目に入った。

なんだこれ。

上履きをはきながら封筒を見ると、宛名のところに硬筆のお手本みたいな字で南圭一様と書かれていた。

一年生の教室がある三階に向かって歩きながら、封を切る。そこにはこう綴られていた。

『いきなりこのような手紙を書いてごめんなさい。今日の放課後、もしお時間があったら体育館裏のポプラ並木の前に来て下さい』

これって……。

いわゆるラブレターというやつじゃないだろうかとおれは思った。そりゃあ靴箱に手紙ときたら普通、ラブレターと相場が決まっている。しかしそんなのは一昔前のドラマや漫画でしかお目にかかれないう話だ。あまりの現実感の無さにおれはぼおっとなりながら教室に入った。

「おはよ圭」

「ああ、おはよう」

同級生たちにあいさつされ、現実引き戻される。

「それなに？ 手に持ってるの」

「プリント？」

ラブレターについて尋ねられ、おれは少し焦る。

「え？ そうそう、さっきそのへんの店の前でもらったんだ」

正直に答えるのはなんとなく恥ずかしいので、とっさに嘘をついてしまった。

「へー、クーポンとか？」

「う、うん、まあ」

おれがモゴモゴしていると始業の鐘が鳴った。

「やば。河村来るし」

みんなが席に着きだす。おれも窓際の自分の席に移動した。

「ん？」

誰かに見られている気がして斜め前を見ると、新藤ひかりがこちらを見ていた。だがおれと目が合うと整った顔に驚きの表情を浮かべ、慌てたように前を向いてしまった。

なんだ？

なんで彼女がこちらを見ていたのだろう。

しかしそのとき教室に担任の河村先生が入ってきた。級長の号令でみんな立ち上がる。おれの思考は中断された。

六時間の授業が終わり、放課後になった。おれはショルダーバッグを肩にかけ、教室を出た。

一体誰がおれにあんな手紙をくれたのだろう。今だに信じられず、いたずらじゃないかとも思ったが、とりあえず体育館裏に向かった。

「あつ……」

体育館裏にたたずむ少女の顔を見て、口から思わず声が漏れた。

「南くん……」

そこに立っていたのは、新藤ひかりだった。

あの手紙を書いたの……新藤さんなの？

新藤ひかり。成績優秀で容姿端麗。それなのに気取ったところがなく、控えめな性格。

要するに、うちのクラスの、いや学年のアイドルだ。

「ごめんなさい、いきなり呼び出ししたりして」

「え、いやいやそんなことないよ」

吸い込まれそうなくらい大きな瞳にまっすぐ見られ、ドキッとす
る。

「あの……わたし、南くんに言いたいことがあって……」

ほんのり頬を赤らめながら、新藤さんは言葉を紡ぐ。

「あの、えっと、その……」

手を胸の前でぎゅっと絡ませ、彼女は覚悟を決めたようにこう告
げた。

「み、南くん……わたしと付き合ってください！」

「……へ？」

南くとアイドル

これは、何かの間違いなんじゃないだろうか。

放課後、体育館裏、女の子……。これだけキーワードが揃っているのに、今、目の前で起きた出来事が信じられない。

何も言えずに呆然とするおれに新藤さんはこう言った。

「あの……み、南くん……い、いやですか……？」

「えっ、や、その……」

顔を真っ赤にし、声を震わせる新藤さん。そんな彼女を見ていると、こっちまで心臓が速くなる。なんだか頬が熱くなってきた。

彼女のことは、高校に入ってから知った。

クラスのかわいい女の子が、中学時代からアイドルと言われていることを彼女と同じ中学の奴から聞いたときは、すげえなあと感じました。そのせいか同じ年の女子なのに、何だか近寄り難く感じていた。

そんな子がおれに告白してくるなんて。しかもこんなに恥ずかしながら。
うわあ……。

急にスツとその事実が頭の中に入ってきて、ますます顔が火照ります。彼女の顔が直視できなくなり、思わず下を向いた。

「全然……いやじゃ……ないよ？」

そうぼそつと呟く。何だか情けないけれど、そう告げることしかできない。

「え、じゃあ……」

新藤さんの声に驚きと期待がにじんだ……。ような気がした。

「うん……いいよ、新藤さん」

ちらつと目線を上げると、嬉しそうな、恥ずかしそうな表情を浮かべた新藤さんの顔があった。

「よろしく願います、南くん！」

そして彼女は薄桃色の顔をほころばせた。
おれはこんなにきらきらした新藤さんの笑顔を初めて見た。

南くと噂

一年生のアイドルとただの男子生徒のカップルの噂はあっという間に全校中に広まった。

新藤さんに告白された次の日、学校に行くときとたくさんの人にジロジロ見られた。

そして教室に入るとクラスの奴らが一気に押し寄せてきた。

「わっ、なんだよみんな」

「圭ー！ お前新藤さんと付き合ってるのかよ」

「え？ なんて知ってるの」

「なんでって、有名人の噂はすぐに流れんだよ！ 昨日の放課後から学校中この話で持ち切りだぞ」

なんてこった。あの場にはおれと新藤さんしかいなかったはずなのに。なんて広まるのが速いのだろう。

「てかその答えてことは本当だったことじゃん！」

「マジかよ。えー、あの新藤さん？」

「すげえな圭ー。うらやましー」

みんなの言葉をなんとかあしらって自分の席まで行くと、おれの斜め前の辺りに女子の人ばかりができてるのが目に入った。

「ひかりちゃん、なんで南くんなの？」

「ひかりだったら、もっとかっこいい人だって付き合えるじゃん」
そこは新藤さんの席だった。

女子たちは、おれに対してけっこうひどいことを言っている。しかしそれは誰もが思うことだろう。おれだって不思議なのだ。

一体新藤さんはどう答えるのだろう。

だがそう思ったのも束の間、新藤さんの返事を聞いたおれは絶句した。

「わたしには南くんが一番かっこよく見えるよ」

な……。

なんてことを言ってくれるのだろう。おれは思わずショルダーバッグを床に落としてしまった。

クラス中の視線がおれに向く。

「ちよっ、圭くん!？」

「顔真つ赤だぞ？」

「大丈夫？」

あちこちから声が飛ぶが、そんなのは耳に入らなかった。

おれは嬉しいやら恥ずかしいやらでただただ立ち尽くしていた。

「あっ、南くん！」

パタパタと足音がしたので見ると、おれの傍に新藤さんが来ていた。

「し、しし新藤さん」

「おはよう」

「お、おは、おはよ」

テンパるおれにとびっきりの笑顔であいさつする新藤さん。その笑顔でクラスにどよめきが起きる。みんなが見たことがないくらい、幸せそうな表情だったのだ。

そこに河村先生がやってきた。

「さっさと席に着けーって……南？ 大丈夫か？」

先生にまで心配され、たくさんのイスを引く音の中、おれは放心状態のまま席に着いた。

そんなこんなで一年の新カップルはお互いベタ惚れらしいという噂まで、全校中に流れることになった。

南くと翼センパイ

おれが呆けている間に、一時間目の授業は終わっていた。ただイスにぼおつと座っていると、新藤さんがやってきた。

「南くん、あのね」

彼女が口を開いたそのとき、ガラツという音とともに教室の戸が開いた。女子の黄色い声が飛ぶ。

「南圭一はいるか？」

そこには男の人が立っていた。

百八十センチはあろうかという長身で、足がとても長い。しかも美形だ。男らしいのにシャープな顔立ちで、男のおれの目から見ても、そうとうかっこいい。

ほへえ……。

先輩……だろうか。こんな人がうちの学校にいたとは知らなかった。

「おい、圭一。お前の兄上が呼んでおられるぞ」

窓の傍にたむろしてた奴らに、こそつと声をかけられた。

はい？ おれは一人っ子だ。兄弟なんて一人もいない。

そう思ったとき、新藤さんが声を上げた。

「お兄ちゃん！」

「お兄ちゃん？」

驚いた。新藤さんはお兄さんがいたのか。

だがおれの反応に周りをもつと驚いた。

「圭一！ お前翼さんを知らないのかよ！」

「三年五組、新藤翼先輩！ 陸上部のエースで短距離走者、陽之丘の有名人だぞ！？ インターハイ行ってくつて言われてんだぜ」

「へええ！」

そりゃすごい。おれは帰宅部だしそういう情報には疎い。本当のこと言つと、新藤さんの噂だつてほとんど知らない。

「しかもかつこいいから、もってもて。でも彼女は作ってないんだ」
「硬派だよなあ」

みんな、本当に噂好きだな。

「お兄ちゃん、南くんになにか用なの？」

ふと気がつけば、新藤さんは翼先輩のところに移動している。

「いや、特に用があるわけじゃない。……俺帰るわ。ちゃんと彼にあのこと伝えとくんどうぞ」

「わかってる、大丈夫だよ。じゃあね」

「ん。またな」

彼の優しそうな微笑みに、女子がざわつく。

彼が教室を出るとき、ちらつとこちらを見られた気がして、おれはドキッとした。

「翼センパイ……」

「あんな素敵な笑顔、はじめて……」

「会えて嬉しかったです……」

翼先輩がいなくなると、女子たちの口からほぅっと思がもれる。

「あの……。新藤さん？」

「はい。なあと、南くん」

おれは戻ってきた新藤さんに声をかける。

「あの……。あのことってなに？ おれに関係あること？」

「ああ、お兄ちゃんが来る前に言おうとしたことなんだけどね、南くん今日お暇？」

「えっ、暇だけど……」

「よかった」

新藤さんがニコツと笑う。

「じゃあ今日……うちに来てくれる？」

大変なことになってしまった。

南くと素敵なおうち

「あ、次で降りるよ」

新藤さんの言葉を聞き、おれは慌ててボタンを押す。隣からクスツと笑いがもれた。

「そんなに緊張しなくても大丈夫だよ？」

優しい声で言われると、余計恥ずかしくなる。

おれたちは学校前でバスに乗り、新藤さんの家に向かっていった。

一時間目の休み時間からずっとドキドキしっぱなしだったおれを気遣ってか、新藤さんはあまり話しかけてこなかった。学校を出てから、このバスに乗ってからも、ずっと。

それでもここまで気まずい空気にならずこれたのも、新藤さんの人柄というか雰囲気というか……そんなもののおかげだと思う。

「えつと運賃はわたしが払うね」

「えっ？」

いきなりとんでもないことを言われた。

「大丈夫だよ。ちゃんとお金持つてるし」

「でもわたしが急に誘ったのに……。申し訳ないよ」

「そんなことないよ。気持ちだけ受け取っておくから」

おれが断ると、ほんとにいいの、と見上げてくる。

わ……。

睫毛をぱちぱちさせている表情がなんともいえずかわいい。

「ほんと……大丈夫、だからさ」

顔を背けながら、呟く。

なんでこんなにかわいくていい子が、おれの彼女なんだろう。

『西山町通り』というバス停で降りる。

おれたちの住む鷹矢市は盆地で、いわゆる地方都市というやつだ。そして陽之丘高校は市の東のはずれにあり、西山町はその名の通り

鷹矢の西のはじにある。

つまりバスで市をはじからはじめまで横断してきたのだ。

「大変だね、毎日。朝とか辛いくない？」

新藤さんの家に近づくことでむしろ覚悟ができてきたので、おれは普通に話せるようになってきた。

「そうだね。でもわたし朝型だから」

「あ、そうなんだ」

「うん。勉強も朝だよ」

「へえ、すごいね。何時に起きてんの？」

「四時半くらいかな？」

「うわあ、おれには無理だわ」

などとりとめのないことを話しながら二人で歩く。そんなことがとても楽しい。

だんだん周囲に民家が増えてきた。

「ここだよ。わたしの家」

「ここ？」

新藤さんが止まったのは、真っ白できれいな家の前だった。表札に『SHINDO』と書いてある。

わあ……。

おれんちのマンションも割と新しいほうだけれど、その何倍も素敵だった。

「すごいね、新藤さんの家……」

「そんなことないよ。あとさ、南くん……」

「ん？ なあに？」

おれは視線を新藤さんに戻す。

「わたしのこと……ひかりって呼んで。新藤さん、じゃなくて」

「え……」

ひかりってことは……。

名前で呼ぶってこと？

「えっと、ひ、ひかり？」

なんだか緊張してしまう。

「はい！」

笑顔で答える新藤さ……じゃなくてひかり。

「だったらさ、ひ、ひかりも……おれのこと、名前出呼んで？」

「え？」

「圭……ひかりに呼んでほしい」

少し顔が熱くなってるけど、気にしない。

「えっと……け、け、けいいち……？」

ひかりの顔が赤く染まる。

「うん」

すごい。すごく、嬉しい。

目の前に立つ少女が、かわいくて仕方がない。

「わああ……なんか恥ずかしいけど……」

そう言っつて、ひかりは顔をうつむける。

「……嬉しい……な」

そして家のほうに体の向きを変えた。

「そろそろ中入ろっか」

「う、うん」

おれはひかりの後について、新藤家に足を踏み入れた。

南くと若葉さん

「ただいまー」

「おじゃましまーす」

ひかりに続いて靴を脱ぎ、玄関に揃える。

靴棚の上にはポプリが置いてある。なんだかおしゃれだ。

「おかえりーひかり」

廊下の奥の戸が開き、若い女の人が現れた。

きれいな人だった。Ｔシャツにジーンズというラフな格好なのに、

華やかな印象だ。

「この子がウワサのカレ？」

女の人が近寄ってくる。

「へえ、かわいいじゃない？」

近くでじつと見つめられ、ドギマギしてしまう。

「圭ー、わたしのお姉ちゃん」

ひかりに紹介された。

「新藤若葉でーす」

「あ、あの、はじめまして。南圭ーです……」

「南くんかあ、よろしくねえ」

若葉さんにまるでバラが咲くように微笑まれる。距離が近いので、色っぽい泣きボクロとか、艶やかな長い髪とか、その……ふくよかな胸……とかにも気づいてしまい、ますます心臓が速くなった。

「じゃあ、リビングに行く」

ひかりが言い、おれたちは若葉さんが出てきたドアほうに歩いた。

「そこに座って？」

ひかりにすすめられ、おれはソファに腰を下ろす。クッションが軟らかく、座り心地がよい。

「お茶入れてくるわ」

「わたしがやるよ」

歩きだす若葉さんをひかりが止める。

「いいの、ひかりは南くんと話してて」

ひかりの肩をポンツと叩き、若葉さんはダイニングへ行ってしまった。

「あ、隣……座ってもいい？」

「う、うん」

おれの隣にひかりがストーンと座る。

バスでも隣どうしだったけれど、やっぱりなんだか恥ずかしい。

「えと、お姉さんきれいな人だね」

しまった。いくら身内とは言え、彼氏に他の女の人を褒められたら、嬉しくないだろう。

そう思ったのに、ひかりは笑顔でよく言われると答える。

「妹のわたしもそう思うもの」

「でもお兄さんもかつこいいよね」

学校で見た翼先輩のことを思い出す。あんなお兄ちゃんがいたら、女の子は嬉しいだろう。

「それもよく」

ひかりがそこまで言いかけたとき、

「ただいまー」

「まー」

玄関から二つの声が聞こえてきた。

南くと仲良しきようだい

ガラツとりビングの戸が開き、入ってきたのはセーラー服の美少女と小さな男の子だった。

「おかえり、みのり。銀河」

ひかりが二人に声をかける。

「あー!!!」

いきなり男の子が叫びだし、ソファめがけて走ってくる。そしておれとひかりの間に割り込んできた。

「ぼくのひかりんだぞ!!!」

ひかりに抱きつき、おれをにらむ男の子。まんまるの顔が激しく歪んでいるのに、それでも愛くるしさが消えない。

「銀河！ ごめんね圭一。いつもは誰にでも愛想がいいのに」

ひかりに謝られるが、別に銀河くんの態度は気にならなかった。「うっん、おれ一人っ子だからさ。ちっちゃい子とあんま関わりないからむしろ面白いかも」

笑ってそう答える。

「銀河くんっていうの？ おれ、圭一。よろしくね」

銀河くんはふんっ、と横を向いてしまう。うーむ、どうやら嫌われてしまったようだ。

「みのり。ぼーっと突っ立ってるなら、こっち手伝って。お茶にするから」

ダイニングからひよいと顔を覗かせた若葉さんが、女の子のほうに声をかける。彼女はリビングの入り口のほうから、視線をこちらによこしていた。

「ああ、はいはい」

そう言ってみりのりちゃん（なんか馴れ馴れしいかも）は歩いていく。高い位置で二本に結った髪が、ふわふわ揺れた。

「あの子は妹？」

肩についた校章と赤いリボン。あれは鷹矢西中の制服だ。

「うん、みのりっていうの。今年で中三。ちなみに銀河は年長だよ」

「へえ。下にもきょうだいがいたんだ」

「うん。うちは五人きょうだいな」

「すごいね。おれはじめて見たよ」

今の時代、珍しいだろう。

「それもよく言われる」

そう言っただけひかりは微笑む。

「いいなあ、きょうだい。おれも欲しかった」

「でも一人っ子は気楽じゃない？」

「そうかもだけど、つまんないよ？ 遊び相手がいないし」

「そうだね。わたしもきょうだいでよかったって思ってるもの」

どうしよう。困った顔をさせてしまった。そうだよな、こんなこと言われてもなんて返事すればいいかわからないだろう。

何か言わなくちゃと思っただけ口を開いたところで、

「三人ともー、お茶が入ったわよー」

若葉さんに呼ばれ、おれたちはソファから立ち上がった（銀河くんはひかりの膝の上に移動していたのでそのまま抱っこされた）。

ダイニングのテーブルの上には五人分のケーキが用意されていた。

「わあい！ イチゴケーキだあ」

ひかりの腕から飛び出した銀河くんは、他のより高めのイスに駆け寄る。

おれたち四人も席についた。

縦に三つずつ、横に一つ幼児用のイスがある七人掛けのテーブル。若葉さんとみのりちゃん、銀河くんの左側、ひかりとおれが右側に座る。

お茶は深い色のダージリンティー、ケーキはさつき銀河くんが言っていた通り、イチゴショートだった。真っ赤なイチゴが白いクリームによく映える。

「いただきます」

銀河くんが元気な声を上げたので、他のみんなも食べはじめた。

「いただきます」

最初にイチゴを口に運ぶ。甘酸っぱくて、みずみずしい。

「あー、南くん。シヨートケーキをイチゴから食べる人って手はやくて、すぐチューするんだって」

「は!?!」

斜め前から若葉さんが話しかけてくる。

「お姉ちゃん!?! な、なに変なことなの?」

「ひかり、気をつけなさいよ。こう見えて南くん、狼かも。かわい外見に騙されちゃだめよ!」

「な!?!」

からかい交じりに言う若葉さんと、慌てふためくひかり。

「ちゅー!?!」

ケーキに食らいついていた銀河くんが、今度はこっちの話題に食いついてくる。

「ちょっと若葉さん。変なこと言わないで下さいよ。それにおれ、かわいくないです」

「そうよ、ワカ姉。南さんはただただ平凡だし、付き合って二日目にキスする度胸のある人には見えないけど」

おれの発言に向かいのみりのりちゃんからの援護射撃。さらりとすごいことを言われた気がするが、この際気にしない。

「あら、みのり。そんなことないわ。だって付き合って二日目で彼女の家に押しかけちゃうような人なのよ。相当大胆不敵よ。あと南くんはかわいい。これはあたしが保障するわ」

大胆不敵ってそれはそっちが招待したんでしょう! それに身長も体重も高一男子の平均で、特に顔がいいわけでもないおれに、普通かわいいなんて感想抱かないですよ!!

そう思っても言えるはずもなく、おれは黙り込んでしまう。しかもみのりちゃんまで、それもそうか、たしかに行動はやいなんて呟

きでした。

恥ずかしがるひかり、まくし立てる若葉さん、またケーキを食べだすみのりちゃん、そしてちゅーしたのちゅーと喚く銀河くん。

なんか……。

すごいきょうだいだ。まだ知り合ったばかりだけど、印象があまり似ていない。顔も全員美形だけど、若葉さんはフェミニン系、ひかりがアイドル系、みのりちゃんがお人形系、銀河くんは小動物系と系統が違う。それに翼先輩は男前な人だった。

でも……。

なんだかんだで新藤家のきょうだいは仲が良さそうだ。学校のひかりと翼先輩も和やかでいいムードだった。

きょうだいがいないおれには、それが羨ましかった。

南くと帰りの時間

「そういえば。翼が帰って来ないわね」

全員がケーキを食べ終えたころ、若葉さんが言った。

「たしかに」

「どうしたんだろう、お兄ちゃん」

みのりちゃんとひかりも口を開く。

「翼先輩は陸上部だから、この時間はまだ練習中じゃないの？」

おれはティーカップを口から離し、ひかりにたずねた。今は六時ちよつと前だ。まだほとんどの部活が活動中だろう。

しかしひかりは首を振る。

「お兄ちゃんなの、圭一をうちに呼べて言ったのは。どんな人が会つてみたいからつて。明日は部活も休みだからちようどいいつて言つてたのに帰つて来ないなんて、ほんとにどうしたんだろう」

へえ、おれを呼んだのは翼先輩だったのか。そういえば休み時間、うちのクラスに確認のためわざわざ来ていた。そんなにおれを招待したかったのか。普通、妹の彼氏にそんなに会いたいかな。

「そうだったんだ。でもおれ、そろそろ帰らなきゃならないし」

「そうだよね」

「南くん、うちでご飯食べていけばいいじゃない!!」

「えっ？」

いきなり若葉さんが言い出した。

「お姉ちゃん!？」

ひかりも驚く。

「いいじゃない、せつかく遊びに来てくれたんだから。きっと楽しいし、それに翼も南くとに会えるじゃない」

「そうかもしれないけど……」

言い淀むひかり。

「そんなのダメですよ」

いきなり一人分の夕飯を増やすなんて迷惑をかけるわけにはいかない。それに帰りのバスがなくなってしまう。おれが住んでいるのは陽之丘高校のある朝見町だ。歩けば一時間半はかかる。時間的にも夕飯をごちそうになるわけにはいかなかった。

そのとき、玄関からガラツという音がした。

「ただいま」

「あ、つばさだ!!」

銀河くんがイスから下り、ドアに向かって走る。

「おかえりつばさー」

「銀河」

ダイニングに入ってきた翼先輩に抱きつく銀河くん。

わあ……。

無邪気に笑う銀河くんを優しい眼差しで見る翼先輩。なんだかすごく絵になる。

「お兄ちゃん、遅いよ」

ひかりも翼先輩のほうへ歩み寄る。

「すまない。ちょっと用があつて」

「もう圭一帰っちゃうんだよ」

「そ、そうなのか」

美男美女カップルの痴話喧嘩みたいに見えるのに、この二人も立つてるだけで絵になる。

「あの、おれ帰ります」

せっかく翼先輩が帰ってきたところだけど、仕方がない。バックを肩にかけてイスから立ち上がる。

「圭一、バス停まで送ってく」

ひかりがこちらに顔を向けた。

「いいよ、一人で大丈夫」

「でも」

「あとでひかりが一人になっちゃうじゃん。危ないよ」
痴漢にでもあつたら大変だ。

「だって道、わかんないでしょ」

「う……」

たしかに一人でバス停に行ける自信はない。

「俺が送ってく」

おれたちのやり取りを黙って見ていた翼先輩が、突然口を開いた。

「俺がバス停までいつしよに行く。だからひかりは心配すんな」

「いいの、お兄ちゃん」

「ああ」

「す、すみません」

今帰ってきたばかりの人にまた外に出てもらうなんて、とても申し訳なかった。

「バイバイ、南くん」

「さようなら」

「じゃーなみなみ」

玄関で若葉さんとみのりちゃんと銀河くんに別れのあいさつをされる。

「おじゃましました」

おれは翼先輩と三和土に立っている。

「また明日ね、圭」

ひかりもみのりちゃんの隣で手を振った。心なしか寂しげに見えて、心臓がドキンとする。

「また明日」

おれも軽く手を振った。

そして玄関の戸を開ける翼先輩について、新藤家をあとにした。

南くと冷たい瞳

暗くなった通りを、翼先輩と並んで歩く。

どうしよう……。

話すことが、ない。

ひかりの家を出てから十分は経ったが、ずっと沈黙が続いている。共通の話題といえばひかりのことと高校のことくらいしかないが、その二つに關しても話すべきことが思いつかない。

おれは隣を歩く端正な横顔を眺めた。

おれよりも高い位置にある顔は無表情だが、やっぱりかっこいい。こんなお兄さんがいるのにおれが一番だというひかりが信じられない。

気がつく与会話がないまま、バス停に着いていた。おれたち二人以外、誰もいない。

「おい」

「は、はい」

いきなり声をかけられ、びっくりした。

「おまえ、ひかりのどこが好きなんだ」

「え？」

「さっさと答えろ」

じろつとこちらを見られる。

「えつと……かわいい……ところ……？」

こんなことを聞かれるとは思ってもみなかったので、なんと答えればいいのかわからない。

「他には？」

「他は、み、みんなに優しいところとか」

「それだけか」

「え、えと……」

はあ、と先輩の口から溜め息が漏れた。

「まったく、ひかりもなんでこんなやつを……」

そう呟くと、先輩はおれのほうを見た。おれのほうが背が低いの
で見下ろされ、それがとても威圧的だ。

「おまえ、本当にひかりのことが好きなのか」

「え」

冷たい目におれは立ちすくむ。翼先輩もおれの隣から動かない。

「人気のあるやつに好かれて、舞い上がってOKしただけじゃない
のか？」

「な……」

「今日の放課後、おまえのクラスのやつらに聞いてみたんだが、お
まえ、昨日まで特にひかりに関心がなかったんだろ？ かわいい同
級生くらいにしか思ってたはずだ。それなのに告白されただ
けで付き合い始めた」

そこで一息つき、翼先輩は言い放つ。

「そんなくだらない理由でひかりと付き合ってるなんて……許せな
い」

冷やかに射竦められ、ゾクツとした。

「おまえみたくないやつにひかりを幸せにできるなんて思えない」

無表情のまま、翼先輩は続ける。

「明日にでも、ひかりと別れるんだな。あいつが……傷付く前に」

そして、おれに背を向け、去って行った。

おれはしばらく呆然と立ち尽くしていた。

南くと恋心

どうやって家まで帰り着いたのか、あまり覚えていない。

気がついたら夕食も風呂も終えて、自分の部屋のベッドにねっころがっていた。

どうしたもんかな……。

まさか翼先輩にあんなことを言われるとは思ってもみなかった。でも言い返せない自分がたしかにいて、そのことが情けない。

先輩の言うとおり、おれは告白されるまでひかりに興味がなかった……と、思う。ただのかわいいクラスメートがおれの心に入ってきたのはたった一日前のことなのだ。自分でもわかっている。

こんなんじゃ、告白されて浮かれて付き合っていると知られても仕方がない。

おれは溜め息をつきながら寝返りを打つ。
でも。

おれはひかりが美少女だから付き合っているわけじゃない。

昨日の放課後、おれに告白したあとに見せたひかりのあの笑顔。

あんなきらきらした微笑みを、おれは初めて人から向けられた。

そのとき、おれの中で何かが変わった。ドキッとすると同時に心の中に、温かな何かが広がった。

そのあとひかりといると、同じものを感じるのだ。ドキドキと温かさを。

ただ見るだけで、そばにいるだけでふわふわとした優しい気分になる。心臓が速くなる。こんなのは初めてだ。

きつと。

この気持ちって恋じゃないだろうか。

そう結論を出すとおれの顔は熱くなった。照れ臭さと嬉しさが緋い交ぜになって込み上げる。

おれは顔まで布団を上げた。

もう寝よう。そして、明日……。

ひかりに好きだって言おう。

そう決心しておれは目を閉じた。でも、なかなか寝付くことはできなかつた。

翼とみのり

「ツウ兄」

リビングのソファに座ってテレビを見てみると、後ろから俺を呼ぶ声がした。

「みのり」

振り向くと風呂上がりらしい二番目の妹が立っていた。いつものつまらなそうな顔のまま、俺の隣に腰を下ろす。

「南さんを送ってきたとき……何言ったわけ？」

そう気怠げに尋ねられる。

この妹は何にも興味を示さないように見えるくせに、妙に敏感とこがある。

「ああ。ひかりと別れるって言つといた」

そう言つとさすがのみのりも少し驚いたようだ。

「……ちよつといきなりすぎだと思っただけど」

「いいんだよ」

俺はきつぱりと言いつつ。

「あいつ、別にひかりのこと好きでもなんでもないらしい」

「え？」

「今日の放課後、やつの友だちから聞いた」

そのせいで俺は帰るのが遅くなったのだ。

そいつらの話によると、あの野郎には特に好きな子がいたわけじゃないらしい。ひかりと付き合っているという噂を聞いたときも、デマだと思ったとその一年生たちは言っていた。

おそらくあいつはひかりの顔がいいから付き合っているだけだろう。そんなやつにひかりと付き合わせるわけにはいかない。

「ひかりとは釣り合わねえよ、あんなやつ」

「ぶっん」

そう相槌を打ち、みのりは黙る。しばしテレビの音だけがリビング

グに響く。

「そっぴゃ、お前はあいつのことどう思った？」

冷静に人を判断しそうな妹に聞いてみる。

「別に……。なんか頼りなさそと思っただけ」

気のない返事が返ってきた。

「あたしにはどうでもいいもん、ヒカ姉の彼氏なんて。まあツウ兄はヒカ姉命だからしかたないけどさ」

「うっせ」

「まあ南さんの義理の妹にはなりたくないから、別れてくれたほうがいいかもね」

続けてそう呟く。まったく、口が悪くてかわいげのない妹だ。

「ならおれがしたことに文句はないだろ」

「まあね。銀河も喜ぶだろうし」

そのとき、ドタドタと足音がした。

「つばさ！　みのりん！」

風呂上がりでいい臭いの弟が俺とみのりの間に割り込んでくる。

「ちょっと銀河！　ちゃんと髪拭かないとだめだよ」

肩にタオルをかけたひかりもあとからやってきた。銀河はひかりと風呂に入るのが大好きだ。今夜もいつしよに入ったようだ。

「ひかりんがふいてー」

「もおお」

そう言って銀河の髪を拭くひかり。その顔はとても楽しげだ。

「みんなー、イチゴ食べるわよー」

ダイニングから姉さんの声がする。

「わーい！」

そっぴゃって銀河はまた走り出す。

「あ、ちょっと待ってよー」

タオルを手にひかりが銀河を追いかける。

ほんとに、ひかりはかわいい妹だ。ちゃんと幸せになって欲しい。だから。

あんないい加減なやつには任せられない。
遠ざかるひかりの背中を眺めながら、俺は思った。

南くんと宣戦布告

爽やかな朝だ。

どこまでも青く澄み渡る空を、羊雲は散歩する。きらめく日差しが陽之丘に降り注ぐ。

「翼先輩」

おれはグラウンドを走る先輩に声をかけた。

まだ七時になったばかりなのに一人自主練に励んでいた彼は、足を止めるとおれのほうを嫌そうな顔で眺めた。

「何のようだ」

おれは自分より高いところにある彼の瞳を見つめながら、口を開いた。

「おれ、ひかりの顔がかわいいから付き合っているわけじゃないです」

「は？」

「ひかりと、別れたりしません」

視線を逸らさず、告げる。

「ふざけるな。俺はおまえなんか認めない」

苛立ったような翼先輩の顔。声に怒気が表れている。

「だったら、先輩におれを認めさせてみせますよ」

そう言っておれは微笑んだ。

「見ててください」

おれは先輩に背を向けると校舎に向かって歩きだした。

けっこう強気になっちゃったな……。

一年棟の廊下を歩きながらおれは考えていた。

でも。

おれは本気なんだってこと、先輩にわかってもらえなきゃ意味がない。

あれでよかつたんだ。そう自分にいい聞かせながら、おれは教室の戸を開けた。

「……あ」

「おはよう、圭」

教室の中にはひかりがいた。教室の真ん中の席に座って、英語の予習をしている。

「お、おはよ」

「今日早いね」

「ひかりこそ」

「ほら、わたしは朝型だから」

「そういえば」

ひかりはにこにこ微笑んでいた。開け放たれた窓からの朝の光と風がおれたちを包む。

「……ひかり」

おれは笑顔の少女に歩み寄る。

「なあに？」

自分を見上げる瞳を見つめ、おれは呟いた。

「……好きだよ」

「え？」

「ひかりが大好きだ」

おれはニコツと笑った。

「け、けいいち……」

顔を耳まで真っ赤にするひかり。そんな彼女を見ていると、なんだか幸せな心地になった。

最初はかわいいアイドルとしか思ってなかったのに、一人の女の子として意識しだしたらどんどん惹かれていった。心臓がドキドキして止まらなかつた。こんな気持ちは初めてだ。

だから。

翼先輩になんか負けない。

おれはこの子に恋してる。心からそう思った。

南くんと学園祭

晩春と初夏の狭間の今日この頃。太陽も日に日に元気になってくる。そろそろ学ランも暑苦しい季節だ。

「もうすぐ陽之丘祭だね」

隣からひかりが話し掛けてきた。緑の桜並木から漏れる木漏れ日が、紺のベストから覗く開襟シャツにきらきらと反射する。

「六月の最初の土日だっけ」

「そうだよ！ わたし本当に楽しみなんだ。去年も行ったけど、高校の学祭って感じがすごくしたの」

「そういえば今日のホームルーム、話し合いやるよな」

「ねー！ 楽しみだね」

なんて、話しながら学校までの道を二人で歩く。
幸せなひと時だ、と思う。

おれとひかりが付き合いだしてから数週間が過ぎた。

といっても、まだいっしょに登下校したり、弁当食ったり、放課後教室に残って勉強したりくらいしかしていないけど。

同級生や周りの奴らも、今はそんなにおれたたちのことを話題にしなくなった。……時々ラブラブ夫婦だからかわれるけど。

とにかく、おれはひかりといっしょにいられて、毎日とっても楽しい。

ただ、翼先輩は学校で会うと冷たい視線を向けてくる。これはやつぱり辛い。早く彼に認めてもらえるようになりたい。だって、あんな宣言をしたんだから。

そんな日々を今、送っている。

「さて、今日のホームルームは陽之丘祭の出し物について決める」
五時間目、教卓の前に立つ河村先生の言葉にクラスがざわついた。

「おい、みんな静かにしろ！ 級長、前に出て話し合いを進める」
先生の一言でざわめきが小さくなった。そして「は、はいいい！！」
と、なんだか情けない返事とともにうちのクラスの級長、木村が黒
板の前に飛んできた。

「え、えーと、先週の話し合いで、う、うちのクラスの出し物は劇
に決まったんですが……」

クラス中の視線を感じて緊張したのか、木村は顔を赤くした。

「き、今日はその役割分担をしたいと思います」

「おおお、というごよめきがクラスに広がる。」

「じ、じゃあ広瀬さん、前に来てください」

そう言われておれの列の一番前に座る女子が立ち上がった。

小さな顔にさっぱりとしたショートカット。陸上部らしく日焼け
した肌にしなやかな体つき。広瀬眞菜美だ。

「ぜ、前回の話し合いで決めた通り、か、彼女に脚本と監督を頼み
ました」

クラス劇の発案者は彼女だった。そのとき自分から脚本と監督を
引き受けたのだ。

「脚本を書いてきました」

よく通る声で彼女は言った。背筋もピンと伸びていて、隣に立つ
木村とは大違いだ。

「タイトルは 『眠れる森のシンデレラ』です」

南くんと学級会

眠れる森の……シンデレラ？

どういうこっちゃ。おれは首を傾げる。

「ストーリーは眠れる森の美女とシンデレラをミックスしたような感じですよ」

タイトルのまんまっすな。

「早速ですが、配役を決めたいと思います」

え、今ので説明終了なの！？ まあなんとなくだけでも雰囲気はつかめたしな……。

「登場人物は……」

チヨークを取って黒板を見る広瀬。カッカと音立てて、文字を書き出す。女の子らしい丸文字だ。

シンデレラ

王子

意地悪な母親（魔女）

姉そのいち

姉そのに

仙女

ナレーター

エキストラ&舞台裏

「……です。立候補・推薦がある人はいいますか？」

そしてこちらを振り向く。

「はい」

一人の男子の手が上がる。

「江口くんどうぞ」

「シンデレラ役が新藤さん、王子役が南くんがいいと思います」

立ったまま振り返り、ニヤつく江口。教室のあちこちから、いーぞいと囃し声上がる。

おい。人のことからかうのもいい加減に。

「却下」

教室の後ろから声上がる。

「先生……」

河村先生だった。

「おまえら、学校祭は仮にも授業なんだぞ。そんなふざけたことは認められないぞ」

と、さらりと言い放つ。

先生の一言はありがたかったけど、おれたたちのこと、教師陣にも知られちゃってるのね……。

「ほかに案はないですか？」

改めて広瀬が尋ねる。しかしさっきの先生の一言で教室が一気に冷めてしまい、誰も手を挙げようとしない。

どうしよう……。

なにも悪いことはしてないのに、ちょっとだけ罪悪感を感じる。

「はい」

「新藤さんどうぞ」

そんなとき手を挙げたのは、ひかりだった。

彼女は立ち上がり口を開く。教室中の視線が中央に集まる。

「わたしはくじ引きがいいと思います」

そう言っってひかりは微笑んだ。

南くとくじ引き

「くじ引き？」

広瀬が聞き返す。

「そう、くじ引きです。劇の主演とかって幼稚園くらいの頃ならやりたいやっていたって言えますけど、高校生にもなっちゃうと照れ臭くって立候補できないと思うんです。そのせいで後悔しちゃう人もいると思うし。でも、くじ引きなら公平に決められるし、後悔もしないですよ。だからくじ引きを提案します」

ひかりはさらりと答えた。クラスが少しざわめく。

「という案が出ていますが、どう思いますか？」

「いいと思います」

「あたしも」

教室中から賛同の声が上がった。

多分、ひかりの言った『後悔しない』という言葉が大きいと思う。誰だって高校生活に悔いを残したくはない。

「先生、いいですよ？」

「ああ。いいんじゃないか」

あと『公平』は先生受けがいいし。まあ自主性がないのは痛いかもだけぞ。

「じゃあ、くじ引きにします」

そう言っただ瀬がちらつと横に視線を寄せると、木村は慌てたようにリサイクルボックスに駆け寄り、紙を何枚か取り出した。

……なんか、パシられてるぞ。

「じゃあみなさん。出席番号順に教卓前まで来てください」

広瀬の言葉に廊下側からみんなが立ち上がる。

おれは特に運がいいわけでも悪いわけでもない。だから全部で七個しかない名前のある配役にはならないだろう。

もしひかりがお姫さまだったら。

おれはドレスをまとつたひかりの姿を想像する。

絶対にとても似合うだろうと、惚れた欲目とかじゃなくて本気で思う。ただもしそうなら、他のやつとラブロマンスを演じられることになるのであまり愉快じゃないけれど。

なんて考えてると俺の番になっていた。慌てて教卓へ向かう。

残り少なくなってきたくじを適当に掴む。その場で開こうとする
と、

「南くん。全員がくじを引いてから中を見てほしいってさっきから言ってるんだけど」

ちよつとイラツとしたように広瀬が言った。

「あ、ごめん」

おれはそろそろと自分の席に引き返した。

「さて、みんなくじ引きをしたので開いてください」

広瀬の言葉と同時にクラスが騒がしくなる。

おれも開こうとしたその瞬間、

「新藤さんシンデレラじゃん!!」

という声が教室の中央から上がる。思わずそちらに視線を寄せる。

「おー、いいね」

「ぴつたりだ」

「頑張つてね」

教室中から声上がる。

……まじで？

おれの妄想が現実のものになってしまった。

じゃあ王子は誰だ？ そう思ったのも束の間、

「え!?! 級長が王子かよ」

という声が教室の前のほうからした。

「新藤さんと級長!?!」

「えー、ウケるー」

「級長とちんなよー」
またクラスがざわつく。

なんだ。

よかった、木村で。他のもつとカツコイやつ（ごめん、木村）
になられるよりずっとましだ。そりゃあ一瞬自分だったらよかった
のに、なあんて思ってしまったことは否定できないけれど。

チラツと木村の顔を見る。狼狽がモロに顔に出ている。しかも目
があつてしまふ。困ったような顔をされたので、にっこりと笑つて
みたけれど、なんだかより焦られたようだ。

「みなみー、カノジヨ盗られちゃったじゃーん」

「早くも破局の危機かー？」

周りの席の奴らのはやしてくる。

「あほかよ、お前らは」

「ところで南は何の役なの？」

「あ、おれは……」

そういえばまだ自分の役を確認してなかった。手に握つてた紙を
開く。

どうせエキストラくらいだろ。そう思っていたのに、

「え……」

そこには想像もしていなかった役名が書いてあった。

「南、まじかよ……」

「お前がそのポジションかよ？」

「おお！ もしろくなってきたじゃん」

そんなあ……。

おれが適当に選んだくじ。その紙には小さな文字で『魔女』と書
かれていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6267k/>

南くんと新藤家のヒトビト

2011年1月12日12時10分発行